

1 研究テーマ

子ども一人一人の課題に応じた支援のあり方
～特別支援教育の視点から～

2 はじめに

特別支援学級を担当し、子ども一人一人の課題に合った支援の大切さを痛感した。支援は特別支援学級、通常の学級の別なく大切なことであると感じた。支援とはどうあるべきなのか、ということは今一度考えてみたいと感じていた。

3 研究目的

子ども一人一人の課題に応じた支援のあり方について、特別支援教育の視点から探っていく。

4 研究内容

支援を考えると、下図のように2つに分けて考えることとした。

(1) 特別な配慮の必要な子どもに直接
かかわる支援

(2) その子どもの環境や状況にかかわる支援
① その子どもの学級集団への支援
② 小学校へ入学するときの移行支援

(1) 特別な配慮の必要な子どもに直接かかわる支援

① 支援を考えるうえで

「行動の背景を予想する」「長所をいかせるようにする」「できたら即座に認める」の3点に留意することが大切であり、子どもの自己肯定感を高めるようにすることが前提であると考えた。

② 個別支援の実際

児童Aは、元気がよく、大人にも物怖じせず積極的にかかわることができ、知的理解は高いという面を持つ一方で、学習中に集中することができにくい傾向があった。校内でチーム支援をし、家庭との連携を密にしていった結果、次第に落ち着いた行動が取れるようになった。そこからこれまでとは違う特徴が見えてきた。それは、人からの情報(身振り、表情、肉声)を得られにくいという状況だった。

- ・学習の流れやめあて、ルールを書いたカードを提示する
- ・見ればすることがわかるようなワークシートを準備する
- ・注目させるためにハンドベルを使う
- ・ペアトークやグループトークを取り入れる

算数の学習に
おいて左記の
支援を行った。



ハンドベル

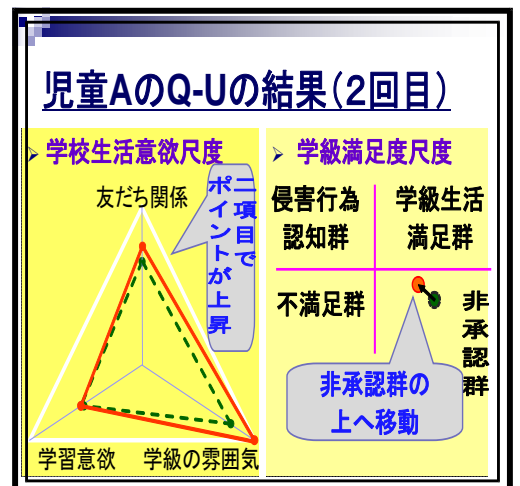
【結果】プリントに正しく書き込むことができ、ハンドベルにも反応して教師に注目できていた。

【考察】見ればすることがわかるワークシートとハンドベルは有効であった。学習への参加度だけでなく、理解度が高まるための支援も考えていくことが課題だと考えられる。

(2) 子どもの環境や状況にかかわる支援

① その子どもの学級集団への支援

特別な配慮を要する子どもは、その環境の調整しだいで現れる様子が違ってくることが多い。そこで、所属する学級集団を高めていくことが支援になると考えた。児童Aの学級はきまりがあり落ち着いており意欲的に学習していた。10月に実施した、この学級のQ-Uの結果は満足群と非承認群が全国平均より、やや高かった。児童Aの結果は学校生活意欲尺度ではいずれの項目も7～10ポイントで、学級満足度尺度では非承認群に位置していた。そこでソーシャルスキルトレーニングの学習「あったかことばをかけよう」と構成的グループエンカウンターのエクササイズ「どっちがいい?」と「あいこじゃんけん」を実施した。12月実施の児童Aの結果(右図参照)は、学校生活意欲尺度では、2項目で1～2ポイント上がっていた。学級満



足度尺度では非承認群に位置していたが、上へ移動しており満足群に近づいていた。

【考察】児童Aの学校生活意欲尺度が上がったのは、担任をはじめ教職員の適切なかかわりで信頼関係が高まったからだと考えられる。友だち同士のかかわりが、さらにあれば学級全体や児童Aの承認得点は上がるのではないかと予想される。

② 小学校へ入学するときの移行支援

個別の教育支援計画の活用を含め、保育所・幼稚園と小学校の情報交換のあり方は重要である。そこで保育所・幼稚園と小学校との共通点と相違点をまとめてみると以下のことが言える。

	保育所・幼稚園	小学校
指導方法	環境を通して間接的に	教科書や教材を使い直接的に
ねらいの設定	比較的子どもの実態から	学習指導要領と子どもの両方から
子どもがクリアしていくことがら	子どもの内からくる課題	子どもの外からくる課題
学び方	遊びで学ぶ	授業や学習で学ぶ

【情報継ぎの際に】
 保育所・幼稚園での遊びのなかで、幼児は「内からの課題」に応じながら「自分づくり」をしていく。このことは、小学校以降にくる「外からの課題」に応じていく力の基になる。子どもが「自分づくり」のどの段階にいるのかを見取ることは、小学校での有効な支援につながるのではないかと考える。そのために鳥取大学附属特別支援学校の「自分づくりの段階表」を参考に「就学移行支援引継ぎシート」を作成した。(右図参照)

就学移行支援 引継ぎシート

氏名	性別 (女 男)
生年月日 (平成 年 月 日)	
本人、保護者の職	
専門機関、医療機関	
特徴 (性格、行動)	
コミュニケーションについて 人の話を聞く (目で) ・ 1対1の状況では ・ 1対多の状況では 自分の気持ちを話す (目で) ・ 1対1の状況では ・ 1対多の状況では 表情はないだろうか ・ 喜ぶ表情がどの程度だろうか ・ トイレについて ・ 和式トイレが使えるか ・ 自分で立ていえるか 車輪について ・ 一人でできるか	
遊びについて ・ ルールのある遊びができるか	
友だち関係	
好きな遊び、もの、こと、場所、人	
嫌いな (苦手な) 遊び、もの、こと、場所、人	うまくいった手立てとともに記入

自分作りの段階表を使った引継ぎ支援シート

◎、○、△でチェック

【5歳から7、8歳】 自己形成獲得の時期
 外界から自分を見つめることができる
 多量のなでつきや失敗を乗り越えて、自分でできたことへの満足感を持つ ()
 集団のなかでの自分の立場がわかり、役割を果たすことに喜びを感じる ()
 見通しを持って取捨選択をする ()
 友だち同士だけで、一つの世界を作って遊ぶ ()

【4歳から5歳半】 自制心の形成期
 自分をコントロールできる
 いろいろな経験が生まれるが、自分で立ち直ろうとする ()
 友だちを求め、ごっこ遊びがさかんになり、役割を果たすことに喜びを見出す ()
 「前はこうだったから次はこうしよう」といった修正ができる ()

【3歳から4歳半】 自制心の芽生えの時期
 外界から、自分のことを見ることが少ずつき始める
 年下やクラスの友だちのことを気遣い、行動しようとする ()
 少し先のことを楽しみにしながら、自分なりに今をがんばる ()
 「～してから～する」ことがわかる ()

【3歳から3歳半】 他者を受け入れようとする自我と自己主張の矛盾拡大の時期
 他者 (外界) の中での自分の存在をわかり始める
 共通してくれる大人の励ましをええに、少し苦手なことにも挑戦してみようとする ()
 新しくできるようになったことを楽しみ、喜んで繰り返す ()
 少し先のことを楽しみにしながら、少しは我慢する ()

【2歳から3歳】 自我の充実期
 自分以外の他者 (外界) の存在に気づく
 少し先のことを楽しみにする ()
 次にすべきことがわかり、見通しを持って活動することができる ()
 自分でしたい遊びや活動を見つけて役割する ()

【2歳から2歳半】 自我の拡大期
 自分と他者 (外界) の違いに気づく
 「見立て」活動で言葉や媒介に友だちや身近な人とイメージを共有する ()
 何かたり、つくったりしたものに意味をつける ()
 自分のしたいことを言葉やサインなどを使って要求する ()

【1歳から2歳】 自我の萌芽期、誕生期
 自分に気づく
 共通感を求め、拒絶しをする ()
 人とかかわりあって共感することの楽しさを味わう ()
 好きなことに援助を受けながら取り組む ()

5 研究のまとめ

- 支援は本人へだけでなく、あらゆることがある。また自己肯定感を高めることが大きな前提である。
- 特別な配慮を必要とする児童への支援は、言動の背景にあるものを予想し、それに応じた支援をすることが大切であり、背景を予想する際には認知面からのアプローチも大切であることがわかった。
- 支援の方法はそれぞれの児童で異なり、より適切な支援を考え、探し出していくことが重要であり、それはあたたかな人間関係のなかでこそ効果を発揮するものだと感じた。
- 集団への支援と個別への支援は、両方がセットでなされるべきものであることを再認識できた。
- 保育所・幼稚園からの情報を引き継ぐときには、子どもが「自分づくり」のどの段階にいるのかを把握することが重要であると感じた。

6 今後の課題

- 集団全体へ有効な支援であるユニバーサルデザインの授業づくりについても、今後さらに考えたい。
- 保育所・幼稚園からの引継ぎには、互いのシステムやとらえ方の共通点や相違点を理解し合うことが必要であり、どのような形態なら負担感なく互いを理解し合えるのか、今後検討していきたい。
- 就学支援引継ぎシートを活用しての、移行支援会議の効果的なもち方や具体的な支援のあり方などについては、今後検討していく必要がある。

7 おわりに

一人一人の課題に応じた支援のあり方ということで研究を進めてきたが、どの子どももいろいろな個性をもち、様々な背景をもっている。その子どもたちが自立した豊かな人生を送るためには、何が必要かを問いながら支援を考えていく、という姿勢を忘れないようにしたい。

